

テーマ	現代こども学科の学修サイクル ―多様性と調和―
発表内容	現代こども学科で大切にしている学修サイクルの模擬的体験と実践報告
発表者	勝浦眞仁・吉永紀子

発表概要

現代こども学科では、学生が「体験」し、それを「省察」して、自身の「経験」として語れるようになることや、他の文脈においてそこでの学びを活かすようにできることを目指している。分科会では、こうした「体験→省察（リフレクション）→経験」の学修サイクルを参加者に体験していただくミニ・ワークショップを前半に行い、その後、上記の学修サイクルを重視して取り組んだ本学科の必修科目の授業実践を報告した。



前半のワークショップでは、インドネシアの楽器で、ユネスコの無形文化遺産に登録されているアングルンを紹介した。実際に演奏を行い、「ド」や「レ」など、同じ音でも演奏する人によって異なる音が出ることを示し、多様性の中で音が調和してくることを説明した。次に、グループに分かれて練習と演奏を行った。アングルンとハンドベルの違いを感じるために、それぞれ3グループに分かれ、「さんぽ（となりのトトロ）」と「きよしこの夜」の2曲を1グループずつ演奏した。その感想を3名の方に言語化していただき、現代こども学科の学修サイクルの特徴である、体験から省察へと導くプロセスを体感していただいた。

後半の実践報告では、学科必修科目（かつ教職必修）である「教育方法と技術（ICT活用を含む）」の2024年度の取り組みを事例として取り上げた。本科目は学科のディプロマポリシーの一つにある「与えられたものに満足せず、失敗を恐れず、自分にとって未知の世界や領域にも想像を働かせ、既成概念にとらわれず、新たなものや斬新な見方・考え方を創り出す『創造的想像力』を発揮し、行動に移すことができる」を念頭に置いた授業計画となっている。「学ぶ」ということに対するマインドセットを受講者自身が捉え直すことができるように、「学び」観の更新に資するさまざまな学習活動を組み合わせて実践してきた。なかでも、①構成主義的学習論における重要概念を、受講者が自身の体験に根差して省察・理解する過程を充実させる仕掛けや、②任用されたSA（スチューデント・アシスタント）が提供する省察深化のためのツール（スクライビングとRTV）を活用し、体験に没頭する受講者が省察を通して自身の学びを実感できるようにする取り組みを紹介した。こうした受講者による省察は、授業者が実践を改善していく重要な手がかりを提供してくれるものであり、授業者自身も受講者の声を踏まえた省察の質を高める挑戦の途上にあることを報告した。

質疑応答

40名を超える参加者に恵まれた分科会終了後、数名から報告に対するご質問をいただいた。大別すると、一つは、実践者の省察の質を高めることの重要性について、もう一つは、学習者の省察の質を高める工夫についてであった。

前者についてお聴きしたなかでは、教師自身が自分の実践を自己省察し、授業改善につなげていく上でも、そもそも「省察するとはどういうことか」という本質的理解が重要であると再認識した。一方、後者のご質問は、学習者が自分の学びをふり返って綴る学習感想をめぐるもので、報告者自身も悩みどころであったため、報告では紹介していなかった点も踏まえて補足した。たとえば、書き言葉でふり返る前に、受講者相互で対話することを通して、学習者自身が書きたくなる内容や視点を見いだすこと、教師自身も対話相手となって学習者が自身の学びを意味づけることへの足場をかける役割を担うことなどを挙げた。

今後も、学習者自身が自分の言葉で省察を語り綴ることを通して、自分にとっての学びの意味を生成することのできる学びの空間づくりを模索していきたい。そして、教育課程全体を通してこの学修サイクルを実践し、省察する力の高まりを学習者自身が実感できるようにしていきたい。